

新しい図書館！

医学図書館長 中村 桂一郎

久留米市のイメージキャラクター“くるっば”をご存じでしょうか。医学図書館にも二つのキャラクターが誕生しました。西洋医学の象徴イトアくと久留米の医トえもんです。医学図書館を身近に感じ、足を運んでいただきたいという想いから生まれました。私が附属図書館医学分館長を拝命してこの2年間、全学の附属図書館としては地域に密着した貴重資料のアーカイブ化や機関リポジトリの立ち上げなど、情報発信基地としての機能充実が進められました。機関リポジトリは、大学発の学術情報を一元化して公開することを目的とした仕組みであり、全国の大学において充実しつつあります。まずは学位論文を掲載し、公的資金を使った研究の成果を国民に還元することが当面の目標です。

もうひとつ、医学図書館は大学専門自己点検評価において電子ジャーナルの充実が評価されました。そこに大きな経費が投入されていることを認識し、活用いただきたいと思います。ところで、自分の机で文献検索ができるようになったので、その分、図書館に足を運ぶ必要がなくなりました。私自身もそうでした。それもあって、今、世界中で図書館の変革が進められています。武雄市図書館はその一例です。文科省ホームページには「変革する大学にあって求められる大学図書館像」が掲載されています。電子情報利用環境の整備、図書館員の能力増強に加え、学修の場・小グループによる自学自習ができる場の提供も重要な課題だと思います。ゾーニングの工夫により現状でなんとかできないか、皆で考えています。学部・大学院の学生さんたちからの意見もいただきたく、モニター制度を導入することとなりました。「ひと手間かけて、良い街つくろう」という標語があります。大学の顔としてよく手入れをされ、皆が行ってみたいくなる図書館とあって欲しいと密かに期待しています。

最後に唐突ですが、昨年、帯木蓬生「天に星 地に花」が出版されました。筑後を舞台とした、医師が主人公の歴史小説です。静かな語り感動しました。図書館にありますので、是非、手にとってご覧になってください。